

塾の先生が 地域メディアエーターに？！

原子力災害被災地での リスクコミュニケーションの試み

AFTC たむらと子どもたちの未来を考える会 副代表
有限会社 BENTON 代表取締役
FSAC 福島ステークホルダー調整協議会 事務局長…

地域メディアエーター **半谷輝己**

お話しする内容

1. どのような気持ちで活動を進めたか？
2. 何が問題だったのか？
3. リスクコミュニケーションがうまくいったところ
(福島県伊達市での活動から)
 1. 納得を得られるよう工夫したところ
 2. その他の要因
4. うまくいかなかったところ(や限界)



原発事故以降の活動

1. どのような気持ちで活動を進めたか？

- ▶ 田村市からmixiにて日記を配信「原発から40km;私はカナリヤ」
 - ▶ 福島以外の人々に福島の実情を知らせたかった
 - 40kmの人が生活している事実

2. 何が問題だったのか？

- ▶ AFTC:たむらと子どもたちの未来を考える会を発足させた背景
 - 溢れる情報を読み解くため毎週日曜に勉強会を開催(30回)
怒り;ニコニコする人には放射線は来ない(当初は理解できず)
 - 東電・保安院・政府の記者会見・・・何を信じれば良い？
不安;在日アメリカ人への80km圏外への避難勧告
→ 私たちは、どこへ避難すればよい？
市民集会の主催;市長を招いてテーマを変え3回開催
→ 市民主導であることが市民を前向きに
 - 緊張感を保ちつつ、行政との建設的な関係作りへ

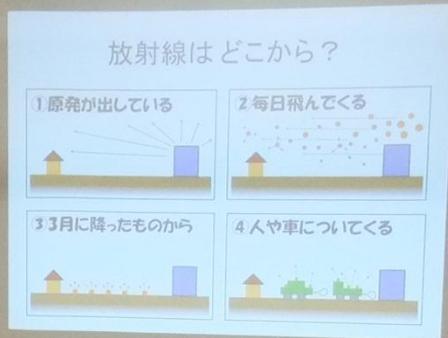


2011.4.5 第一回 AFTC勉強会



溢れる情報を毎週日曜日に共有し分析⁵

第1回 たむら地方市民集会 「原発事故を正しく知るために」
主催 / たむらと子供たちの未来を考える会 共催 / 田村市・三春町・小野町



第一回 AFTC主催・市長を招いた市民集会

放射線対策考える



放射線対策で公開討論を展開した（左から）佐藤教授、冨塚市長、宮崎助手、半谷副代表

田村で市民集会

東京電力福島第一原発事故を受け、「原発事故を正しく知るために！」をテーマにした緊急たむら地方市民集会は9日、田村市文化センターで

開かれた。約700人が参加。放射線と向き合った今後の生活の在り方を探った。市民有志でつくる「たむら子どもたちの未来を考える会」（白石高司代表）の主催、田村市、三春町、小野町の共催、福島民友新聞社などの後援。

5月に続いて2回目。今回は「放射能と医療と健康と食」をサブテーマに、冨塚宥暉市長、宮崎真福島医大付属病院放射線科助手、放射線の研究に携わった経験を持つ同会の半谷輝己副代表が公開討論を繰り広げた。佐藤理夫福島大共生システム理工学類教授がコーディネーターを務めた。冨塚市長は、市独自で始めた大気中や土壌の放射線量のモニタリングを強化す

市長や専門家、公開討論

る意向を示し「健康で長寿の市を目指し市民と協働で放射線からの安全対策に取り組んでいく」と訴えた。宮崎助手は、内部被ばくの仕組みや人体に与える影響を説明。半谷副代表は、厚生労働省などが公表している食品から検出された放射性物質の数値を示し「子どもや妊婦は天然シイタケやタケノコには注意する必要がある」と指摘した。佐藤教授は「放射性物質を減らすことで放射線量が下がる」と除染の重要性を強調した。「放射線量はうそをつけない。安全と危険を二者択一で考えず、各自で情報を判断して不安を和らげていくよう訴えることが求められる」などと語った。



背景にある問題意識

放射線は怖いけど、それだけが問題？

▶ 田村市で生きる事を決意

AFTCのHPで食品の放射能測定データをグラフ化し
情報発信

→多くの専門家から情報を収集・アドバイスも頂けた

長期汚染地域の住民のための放射線防護の実用的手引き

ベラルーシでの実践を踏まえた住民と保健専門職向けの資料

→放射線測定器も購入・赤い羽根助成金の支援

情報を整理すると・・・

工夫すれば放射線はそれほど怖くない？



▶母の死

→新たな活動への大きな分岐点

20km圏内の兄弟・親類が避難する中、

平成23年10月26日に埼玉県の避難先で母が衰弱死する。

→チェルノブイリ原発事故後の精神的ストレスの報告を知っていたが母の死を防げなかった

環境の変化・故郷を失ったストレス・運動不足

恐ろしいのは放射線より避難生活？

→リスクのトレードオフの失敗ではないか…

→東北人の気質が原因？ →おんなへんに家の嫁？

→コミュニティ喪失のリスクの大きさは？



避難中・避難先で起こっている事実

- 双葉町新山字下条の15軒ある実家の隣組で亡くなった老人は、母で5人目
- 震災関連死1618人（震災後から2012年3月末時点まで）
 - 避難生活長期化・移動のストレスなどが原因（復興庁）
 - 福島県764人、宮城県636人、岩手県179人、茨城県29人
 - その後、半年間の福島の震災関連死者数35人（復興庁）
（この間の全国の関連死者40人中、35人が福島に集中）

一番怖いものは・・・ 放射線や放射能なのか？

心の病気 ストレス 働かないこと

欧米人のリスク処理の仕方

リスクを英雄に置き換える

また狩りに行ける

日本人(東北)のリスクの処理の仕方

ひたすら吸収する→ストレス

吸収しきれないと、どこかへ押し付ける

いじめ 村八分⇒鎮守の森＝神社

2012.7.21に南相馬市の津波の被災地で見たもの

新しいお墓と幼い馬の意味

帰るところがある事が大切

- 様々な考え方があるところであり、一つの考え方を示している
- いずれにせよ、生きて行くには何らかの「物語」が必要

よそ者は、いつまでもよそ者

生まれ育ったところが帰るところ

消防団 青年団 どこそこの息子、娘

お寺 = ご先祖様のお墓 お盆 ⇔ 年寄り

森の鎮守 = 神社 お祭り ⇔ 若者

新しく開発された住宅地の魅力作りは？

限界集落 ⇒ 孤独死

お墓がない、お祭りがいない ⇒ 故郷ではない？

記録 = 生きた証 ⇒ 命より大切なもの

命を危ぶみ故郷を離れた者が帰るための理由、

命より大切なものの復活

生きるための心の拠り所(実家?)

帰る帰らないは自由、

でも、帰るところが無ければその自由も無い

こころの支援？



・FSAC 福島ステークホルダー調整協議会を発足

・環境リスク学・放射線医学・環境経済学・生態学・社会科学etc

の専門家の支援を受けての活動

①専門家の研究・調査への支援

→防護対策の費用便益分析のための経済調査、乳歯の収集etc

②市民集会の開催への支援

→田村郡小野町の産業廃棄物処理場の稼働阻止集会に助言

③伊達市健康推進課の事業に参画；講話と健康相談窓口担当

→講話(幼稚園・保育園・小中学校の保護者33回、
一般市民29回、市職員2回)

→放射線・食品・補償・訴訟の悩みの個別相談45回

④KRM 家族とリスクマネジメント勉強会

→全国10カ所にて21回 その他20回

⑤福島県除染対策課への支援→ピーチプロジェクト

⑥若者の活動支援(G-1グルメグランプリ)



伊達市での 地域メディアエーターの試み

3. リスクコミュニケーションが うまくいったところ

- ▶被災者のみなさんの人気者になれた
- ▶伊達市民から健康福祉部健康推進課への苦情が減少
→自治体に不信を持つ住民と市の担当者の間に入り、
関係を改善
→参加者アンケート結果も活用し担当者と緊密に連携

■放射能を知ろう！食品の安全性講話アンケート報告

市では放射能に関する心のケア対策として、市民の皆さんの食生活への不安解消のために「放射能を知ろう！食品の安全性の講話」を開催しています。

保育園や幼稚園、小学校の保護者を対象に、10月末現在で56回開催し、1,650人が参加しました。その際に、「伊達市に住み続けること」について講話の前後でどのように気持ちが変わったかアンケートを行いました。

講話前は不安が少しでもあると思う人が34%いましたが、講話後には2%に減少。逆に不安なく生活できると思う人が講話前には34%でしたが、講話後に84%となりました。

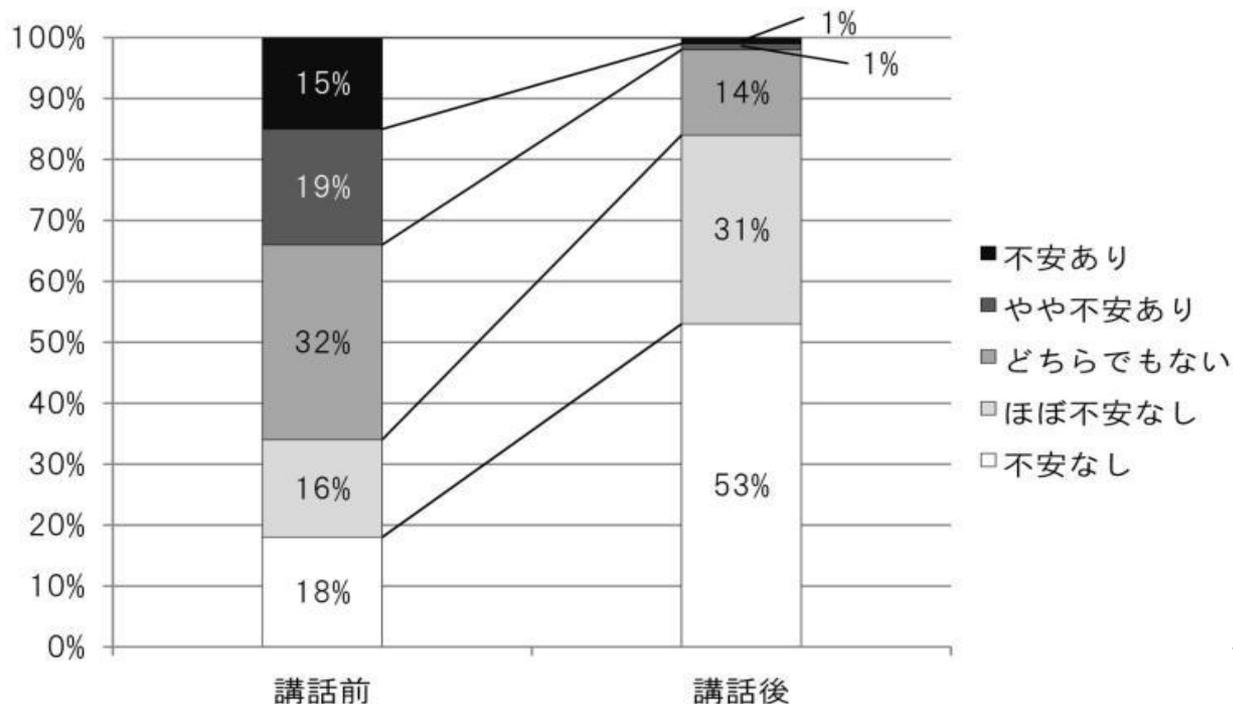
今後も皆さんの不安解消のために講話を続けていきますので、ぜひご参加ください。

講師：放射線安全フォーラム会員 半谷輝己（はんがいてるみ）さん

●アンケート結果

テーマ：伊達市に住み続けること

回答：785人



3.1-1 納得を得られるよう工夫したところ

1. 自然科学的な視点から

- ▶ 他のリスクとの比較→トレードオフ・マネジメントの提案
- ▶ 多くの専門家のスライドを使用→信ぴょう性が高まる
- ▶ 公的機関の測定データを重視(WBC・TDS・個人線量etc)
→思い込みによる独自説は排除
- ▶ スライドはビジュアルを重視→動画も採用
- ▶ 新情報の先取り→放射線のシンポジウムや勉強会に参加

WBC : ホールボディ測定による内部被ばく検査
TDS : 食事調査による内部被ばく推定



3.1-2 納得を得られるよう工夫したところ

2. 社会科学적인視点を取り入れたところ

- ▶ 自己紹介→この人の話なら信じられる(ジャパネットたかた)
- ▶ トークショーを意識→参加者に質問攻め・飽きさせない
- ▶ 話が面白い・分かり易い→学校の勉強は嫌いだけど塾は好き？
- ▶ 本音をきちんと代弁→多くの東北人は本音を言わない
- ▶ 痛み・苦しみ・怒りの共有→同和教育の手法
- ▶ 論理だけでなく感情にも訴える→話術が必要
- ▶ 東電も含め全ての関係者の努力を認める→否定的感情を救う
- ▶ 自然科学以外に社会学的・心理学的な視点を重視



3.2-1 リスクコミュニケーションがうまくいった他の要因

1. 個性的要因

- ▶ 原発のある町で育った(原発から3km)
 - ▶ 小学5年生の時、福島第一原発サービスホールで幾度も原子力の授業を受けた経験
- ▶ 被災者(東電と争っている当事者)
- ▶ 放射線と食品・牛乳に少し詳しくかった(元協乳研究所員)
 - ▶ チェルノブイリ原発事故後の輸入チーズの放射能測定の補佐
 - ▶ キノコの採取会・鑑定会を主催(元日本菌学会員)
- ▶ 21年のベテラン塾講師(毎日がリスコミ、対象はお母さん)
 - ▶ 話術に長けている→笑と涙を誘う演出

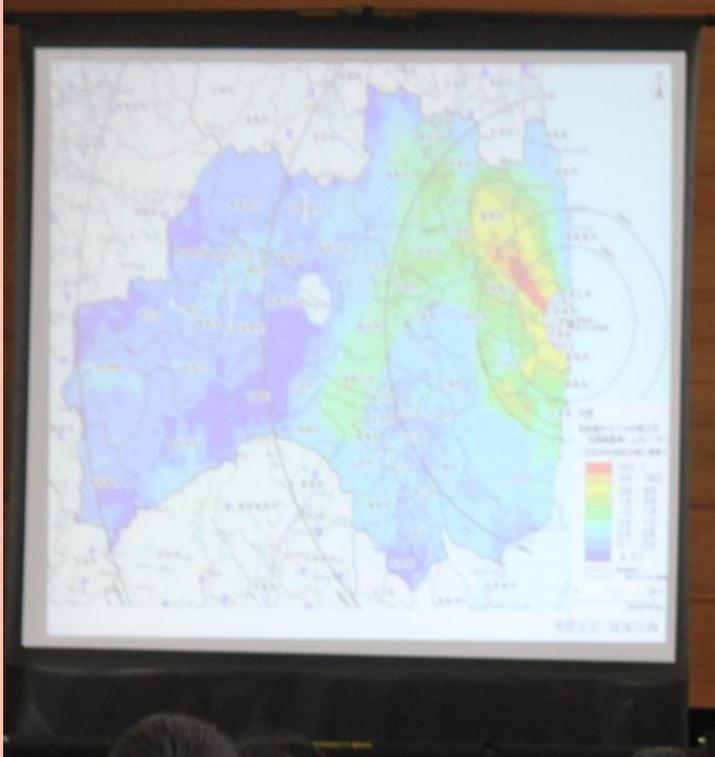


3.2-2 リスクコミュニケーションがうまくいった他の要因

2.手法的要因

- ▶ 地域メディエーターを自称→専門家ではない役割を明示
- ▶ 保健センターに年間常駐する→寄り添っている安心感
「治療できない病気は多くあるが、看護をできない病気はほとんどない」
精神科医 中井久夫氏より
- ▶ 地域住民の精神状態に注意
(被災者のはさみ状格差と被災直後の茫然自失期、英雄期、幻滅期、そして再建期)
- ▶ プラス材料への求め→その判断への支持に覚悟を示す
 - ▶ あなたが決めることと突き放さない
 - ▶ マイナス情報も正直に提示(ホルミシス説の限界も)
- ▶ 自身の自尊感情:福島が好き 日本が好き 人が好き
 - ▶ 近隣の人々の心理的サポート





A male teacher with glasses and a beard, wearing a white shirt and a striped tie, stands in the center of the classroom. He is holding a microphone and appears to be speaking to the class.



伊達市大田小学校

1年生と2年生のしつもん

- ① なぜ目に見えないのにさけなければいけないの？
- ② 放射線には、なぜふれてはいけないの？
- ③ 放射線って、なにからできてるんですか？
- ④ 放射線は、からだにどのくらいまで入ってもだいじょうぶなんですか？
また、どのくらい入ると、がんになりやすいのですか？
- ⑤ 放射線の大きさはどのくらいですか？
- ⑥ 放射線には、どのくらいしゅるいがありますか？



伊達市大田小学校・児童100名に対する リスクコミュニケーション(90分)の試みの結果

平成24年9月27日



2012年度の2校から、2013年度は12校から児童
対象のリスクコミュニケーションの依頼が届いている



教育委員会と学校側からの要望と信頼が必要

- ▶ 小中学校の行事スケジュールは非常にタイトである
- ▶ 塾と小学校は断絶が普通

4. うまくいかなかったところ(や限界)

- ▶ アンケートには、来場しない人のデータが入っていない
 - ▶ 行政に対する強い不信には粘り強い対応が必要
 - ▶ これらの方が孤立しないように対応を工夫
- ▶ 他県の人々から苦情が届くようになった
 - ▶ 避難することを妨害していると受け止められた
- ▶ 一部専門家からバッシングが生じた
 - ▶ 取り組みが理解されず否定的な感情を向けられた
- ▶ 講演のテーマの制約→行政が地域の難問を扱う困難さ
 - ▶ 地域での難問は住民と共に考えて方向性を出すしかない
- ▶ 活動資金が不足
 - ▶ 講演のために学習する費用は県の助成対象外

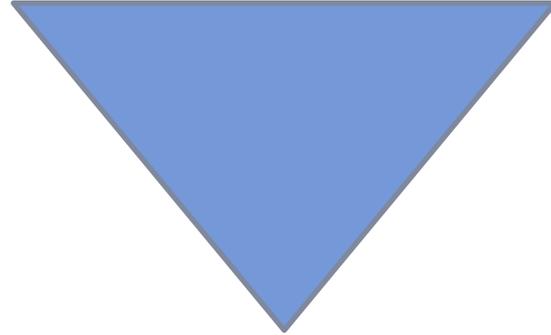


地域メディアエイターは必要？ どうして今までいなかったの？

もつと勉強して欲しい・簡単ではない・
どこから分らないの？・皆さんが決める

簡単に知りたい・ご利益が欲しい・
失敗はいやだ・救ってくれなかったよ？

出し手 専門家



正確ですか？
育てる意識は無い？

前に出ないの？
バッシングが怖い？

不確実性と不確定性

繋ぎ手 地域メディアエイター



受け手 一般人 マスメディア

地域格差 経済格差 情報格差 知識格差

自己至上主義(自分の物差し) 納得=安心

まとめ

- 地域メディエーターは地域住民と専門家をつなぐ役割
地域住民の生活を支える
自治体職員の負担を軽減する
 - 社会的な課題解決一般に役立つ仕組みかもしれない
- このような役割はあまり認識されていない
 - 困っている現場のサポートを推進するために…
 - 幅広い分野の専門家の支援を得て方法論の検討を継続
 - 現場は様々なので実践例のさらなる積み重ねが必要
- 地域メディエーターと専門家のコラボレーションが効果的
平成24年5月22日：福島県栄養士会
平成24年11月21日：福島県県北保健福祉事務所

私からのお願い

小さな島国の日本で疑い合うことに
何の意味があるのでしょうか。

誰もが安心したいと思う立ち位置で協力し合うことに、
誰が反対するでしょう。

今は、融和と調和を

守らなければならない時なのです。

福島は勝利をしなくてはならない
全国の若者たちの力が福島を救う
若者たちの勝利が福島の勝利となる
福島は負けてはいないのだから

「がんばろう福島」

から

「SAVE 福島」

様々な出典(参考にした方々)

- ▶ 国際連合大学名誉副学長・東京大学名誉教授 安井至
- ▶ 産総研フェロー・横浜国立大学名誉教授 中西準子
- ▶ 京都大学名誉教授 丹羽大貫
- ▶ 筑波大学生命環境科学研究科教授 柿嶌真
- ▶ 横浜国立大学環境情報研究院教授 松田裕之
- ▶ 福井県立大学経済学部教授 岡敏弘
- ▶ 福島大学人間発達文化学類教授 佐藤理
- ▶ 一橋大学大学院社会学研究科准教授 猪飼周平
- ▶ 放射線医学総合研究所上席研究員 神田玲子
- ▶ 福島県立医科大学放射線科 宮崎真
- ▶ 東京大学医科学研究所 坪倉正治
- ▶ NPO放射線安全フォーラム理事 多田順一郎
- ▶ 電力中央研究所研究アドバイザー 井上正
- ▶ 放射線医学総合研究所主任研究員 田上恵子
- ▶ 水産庁増殖推進部研究指導課 森田貴己
- ▶ 森林総合研究所情報管理室長 明間民央
- ▶ Tulane University Associate Professor Erik Svendsen

